

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H20. 6. 17)

1. 切断量の推移

(単位:千トン)

	19年度				20年度	
	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q
厚中板	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	94	98	99	101	100	100
規 格	527	514	546	546	540	530
合計	621	612	645	648	640	630

(出所)実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

2. 需要部門別動向

厚板シヤ業界の状況を概観すると、母材需給のひっ迫度合いが一段と強まっており、メーカーロール次第で仕事量が決まるといった状況が表面化している。

需要面では、建設機械、工作機械ともに内需が減少基調で推移しているが、これを輸出がカバーし製造業全体では堅調を持続している。建設部門はこれまでの首都圏、関西、九州地区に加え、北海道、東北エリアの大型建築案件も盛り上りを見せており、紐付き関連需要は総じて好調に推移している。

しかし、一般店売り分野は、2月から4月にかけて、先高を見越した仮需が全国的に台頭したものの、5月以降はその反動から各地区とも荷動きが極端に悪化しており、実需の弱さを露呈している。とくに、メインの中低層建築案件は、改正建築基準法の影響が依然尾を引いていることや、資材高騰、景気の不透明感等により、引き続き不振を余儀なくされている。「建築案件の二極化」が更に顕著になっており、建材シヤも大型案件を扱う大手と中小シヤの温度差がますます拡大してきている。中小の建材系シヤは仕事量の減少と極度の低操業、そして与信不安を抱え非常に厳しい環境に立たされている。

一方供給面では、メーカー・ロールのタイト化が一段と強まっている。各シヤは、足元の納期遅延や出荷削減等への対応に迫られるとともに、当面する来期以降の材料手当てに苦慮している状況である。ロール・ネックが全国的に表面化しており、今後のシヤの仕事量は、母材の確保次第で決まるといった認識が定着している。

切板母材事情は、深刻な供給制約に加え、価格面においても大幅な値上げ発表が相次ぎ、比類のない様相を呈している。こうした環境激変下で、シヤ各社は、引き続きメーカー値上げ分の適正な価格転嫁に努めながら、材料手当てに奔走する状況が続くそうである。

なお、当面するシャア業界の主な課題・注目点は以下の通りである。

①紐付きと店売り分野の需要二極化。中小建築シャアの経営動向、②コンプライアンス対応（独禁法、輸送条件、品質証明問題等）。とくに、品質証明問題については、本年 3 月より当工業組合内に T F を設けて鋭意取り組み中。また、シャア各社は③与信問題、④材料手当てと母材値上げの先行きについて危惧を強めている。

以上のような情勢下、素材厚板や切板市況の現状については、足元上伸基調で推移しているが、今後も、ロールのタイト化が更に進むものと予想されること、メーカー値上げ分の転嫁浸透が期待されること、先高感の台頭などから、更なる市況高騰が予想されている。

なお、主要需要部門の足元の動向を整理すると、概要以下のとおりである。

①橋梁・建築鉄骨の動向

〔全 体〕

橋梁・鉄骨とも大型案件は年内一杯高いレベルの発注が続く見込み。通常からすれば、各社フル稼働できるレベルと思われるが、メーカーロールが更にタイトさを増しており、稼働はロール次第。中小の建築案件は引続き厳しい状況が続く見込み。

（橋 梁）

各 F A B は、ロールネックもあり昨年度以前の案件を大量に抱えている。従って、例年落ち込む 4 月も、今年度は高水準を継続しており、今後も高水準が続く見込み。各社の見込みは、少なくとも年内は続く見込み。H 2 0 年度の橋梁発注は、入札ベースで 4 0 万トン程度の見込みだが、鋼材発注ベースでは昨年度案件のズレ込みから、昨年並みの 5 6 万トン程度見込まれている。

（建築鉄骨）

足元、大手 F A B がゼネコンに対し強硬な値上げ交渉を行っており、1 月以降新規案件の発注がズレ込んでいる。従って、4～6 月はやや低調となるものの、着工時期からも 7 月以降は再度高水準に戻る見込み。

また、現状ゼネコンが抱えている既受注の大型案件は、ふんだんにある模様で、F A B 能力の取り合いになっている状況。従って、年内は高水準の発注が続く見込み。H 2 0 年度の鉄骨需要量は 6 7 0 万トン程度、うち厚板は 1 5 0 万トン程度と見込まれている。

一方、活況を呈す大型案件に対し、中低層案件は改正建築基準法の影響、景気の不透明感等により不振が続いており、全国的に「建築案件の二極化」が顕著になっている。このため、F A B や建材シャアにおいても、受注面等で大手と中小間の格差が拡大している。

（参考：H 1 9 年度の回顧）

〔全 体〕

橋梁が年間を通じて高水準であったこと及び、鉄骨も下期から大きく立ち上がったことから、各社ともほぼ年間を通じて高稼働が維持できた。但し、下期は、メーカーロールが更に

タイト化し、ロールの付き方次第で、オーバーフローする社と穴が空く社が現れた。

[橋 梁]

H19年度は、H17年度後半～H18年度前半の談合問題影響により、H17～H18年度案件が大幅にH19年度以降にズレたこと及び、造船大手が橋梁から撤退したことから、我々の需要家である専業FABの手持ち工事量は極めて高いレベルとなった。

しかし、メーカーロールがネックとなり、生産レベルはFAB要望ほど伸びず、対前年比10%増程度にとどまった。結果として生産は、H18年度2Qから立ち上がり、高原状態が続いており、H19年度は56万トン程度と、年間を通じて安定的に高水準の生産が維持できた。

[鉄 骨]

首都圏の超大型物件がH18年度から大幅にずれ込み、H19年度3Qから本格的に立ち上がった。しかし、6月の改正建築基準法の影響により、H19年度の鉄骨需要量は前年比13%減の640万トン程度となった。うち厚板は大型案件が牽引し同13%増の134万トン程度となった。(H18年度の鉄骨需要量は734万トン程度、うち厚板は119万トン程度。)

②産建機・重電・金属工作機械の動向

(産建機)

建設機械の国内需要は頭打ちの様相を呈しているが、輸出は新興国・産油国を中心に旺盛なインフラ整備需要が続いている。

4月の建設機械出荷額(日本建設機械工業会)をみると、内需が前年比5.4%の減少に対し、輸出は、同17.4%増と2桁増が続き、全体では10.7%増となり、67カ月連続の増加となった。建機メーカーの生産は依然高水準が見込まれている。

これに伴い関係シャーは、生産能力フルの中で更なる増産対応に追われており、また高炉メーカーの限られた枠内での素材調達、数次に亘る値上げの実施等への対処に頭を痛めている。

しかしこうした状況下、北米の景気低迷の影響はユーザー各社の受注動向に確実に現れてきており、現在ネックとなっている部品調達や鋼材の入荷遅れの実態を勘案すると、今後の生産計画の下振れが懸念される。

鉱山機械は大型ダンプ等が大幅増産計画となっているものの、他のタイプは生産調整されており、全体としては増えているが、この分野でもまだら模様の現象が出ている。

(重 電)

重電も堅調な受注が続いている。今後の受注も秋口からの変圧器(+25%~30%)や、H21年初めからスタートする大間原発等々が見えており、また長期的には環境配慮の観点から世界的に再評価され始めた原発建設計画が期待される。

昇降機については、上期の不需要期を迎え、これにマンション建設不振の影響が重なり各メーカーとも受注が落ち込んでいる。

(金属加工・鍛圧機械)

設備投資の先行指標である工作機械受注額（日本工作機械工業会）をみると、5月は全体で前年比1.0%増、うち内需が同8.7%減、輸出が10.1%増と明暗を分けている。ロシア・欧州を中心に輸出が依然好調で国内の落ち込みをカバーしている。

機種別にはタレパン・ベンダーは一時期の好調さは無く、また汎用プレスも落ち込んでおり、国内の設備投資関連は失速が鮮明になってきている。

(参考) 厚中板の用途別受注ウエイト (2006年度)

- ・ 建築用： 18%
- ・ 土木用（橋梁等）： 9%
- ・ 産業機械用（建機、金属工作機等）： 20%
- ・ 電気機械用（重電等）： 2%
- ・ 船舶用： 45%
- ・ 自動車用： 3%
- ・ 鉄道車両、容器等： 3%

(出所) 鉄連・用途別受注統計年報。使途不明分（特約店経由）解明後の最終用途ベース。

以上

全国厚板シヤリング工業組合

シヤー業の厚中板在庫と市況実績推移

(H20. 6. 17)

1. 組合員の厚中板在庫推移(自社所有分)

(単位:千トン)

	19/6末	9月末	12月末	20/3末	6月末	9月末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	467	465	462	438	430	420
前期比/量	4	▲2	▲3	▲25	▲8	▲10
前期比/%	100.9	99.6	99.4	94.8	98.2	97.7

シヤーの在庫量は、18年1月の493千トン(在庫率215%)をピークに、以後減少傾向を辿り、同12月末には445千トンまで削減された。19年は5月末の474千トンでピークにその後一進一退を繰り返しながら、45~46万トンのレベルで安定的に推移した。20年に入ってから漸減傾向が続き、在庫率も3月が149%、4月が152%と直近のピーク(19年5月:182%)に比べ著しく低下している。今後は、需要堅調、メーカー・ロールのひっ迫、材料入手難等が予想され、在庫水準は、漸減傾向で推移するとみられる。

2. 厚板定尺と切板の市況実績推移

(単位:千円)

	19/3末	6月末	9月末	12月末	20/3末
定尺	81~83	81~83	81~83	81~83	114~116
切板	97~99	97~99	97~99	100~102	120~122

(注)定尺、切板(ガス)は無規ベース、東京

19年年初以降、厚板定尺、切板市況とも、ゼネコンの過当競争による安値受注などから、ほとんど変動がないまま推移。その間、小刻みなメーカー値上げが行われたにも拘らず、転嫁が進まず、一貫して足踏み状態が続いた。19年末頃からは母材価格の大幅値上げを受けて、切板市況も上昇に転じている。今後の動向については、メーカー・ロールの一段のタイト化、輸入鋼材の激減など供給面の制約、先高感から、更なる上伸が予想されている。

以上